第3節　中学校

1　国語科

「自己学習システム」を生かしてはぐくむ言語能力と
自己コントロール力、自己肯定感
－第１学年－

(1) 研究の視点

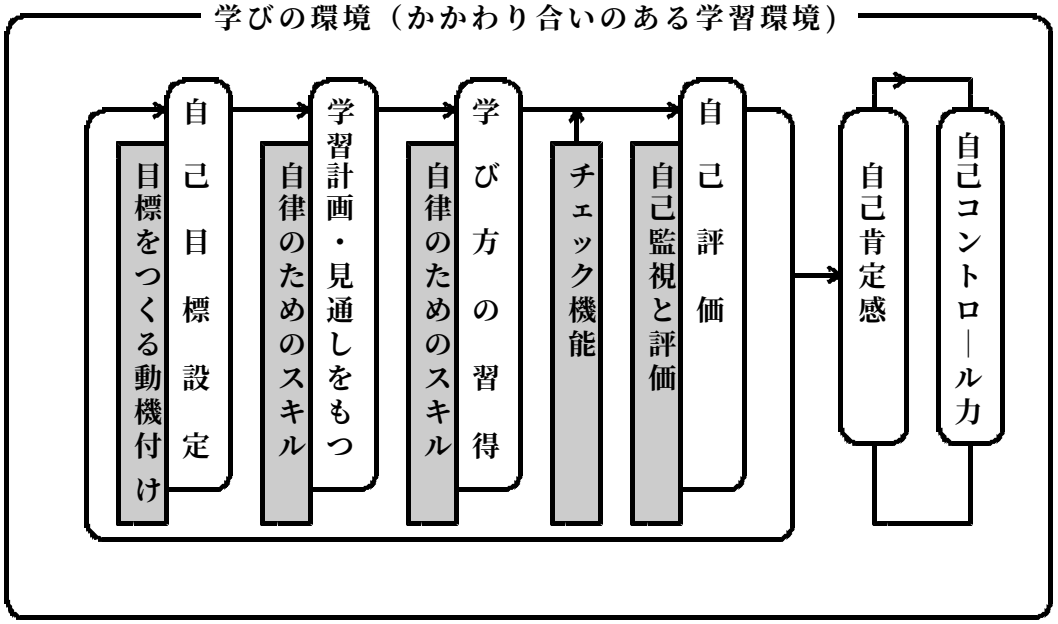
ア 研究の経過

学習指導要領の国語科の目標に示されている確かな言語能力を育成するためには、自己コントロール力や自己肯定感の支えが必要である。また、魅力ある国語の授業を通して、言語の力が身に付いたという達成感や成就感を味わうことは、自己コントロール力や自己肯定感を育成する基盤となる。第２年次の研究では、言語能力と自己コントロール力や自己肯定感を車の両輪のようにはぐくむため、言語意識を明確にした生徒の主体的な言語活動を設定した。その際、自己指導能力を育成する視点やセルフコントロール力を形成する視点、自己制御学習、ソーシャルスキル教育の手法等を生かして取り組み、次のような学習の方向性を導いた。

(1) かかわり合いのある学習
(2) 目標設定、見通し（学習計画）、振り返りの評価活動を充実する学習
(3) 学び方を身に付ける学習

イ 本年度の研究の視点

言語能力の明確化と主体的な言語活動が国語の授業改善の大きな柱となっている今日、生徒自身が自分の学習をデザインし、自分自身の言語能力を把握しつつ学習することは、非常に重要である。そこで、本年度は上に掲げた「(2) 目標設定、見通し（学習計画）、振り返りの評価活動の充実」に重点をおいた学習活動を展開し、自己コントロール力を育成し、自己肯定感を実感させる学習の在り方を具体的に探ることとした。また、「(3) 学び方を身に付ける学習」もこの過程に必要と考え本年度の研究に位置付けた。



「目標設定、見通し（学習計画）、振り返りの評価活動を充実する学習」は、どちらかというと、自己コントロール力の育成に基軸をおいた活動ではあるが、自己肯定感とも深いかかわりがあることを踏まえて実践の基軸とした。

(2)　実践的研究の概要

ア 研究の進め方

(ｱ) 研究の具体的な視点

「目標設定、見通し(学習計画)、振り返りの評価活動を充実する学習」を授業の中で実現するために、学習過程に自己制御学習を段階ごとに取り入れる「ステップ学習」を組み立て、以下のとおり取り組んだ。

セルフコントロールのステップ学習の視点		計　　画
第１ステップ	自己目標設定 （なぜ学ぶのか、どんな力をつけるのか）	９月（読む領域） 単元「私たちのプロジェクト環境」
第２ステップ	学習への方向付け（学習計画）と学習方法設定 （どう学ぶのか）	10月(話す・聞く領域)単元「話し合い名人になろう」
第３ステップ	学習の振り返り（自己評価）→ （学んだことをどう生かすか）	11月(書く領域) 「根拠を示そう」

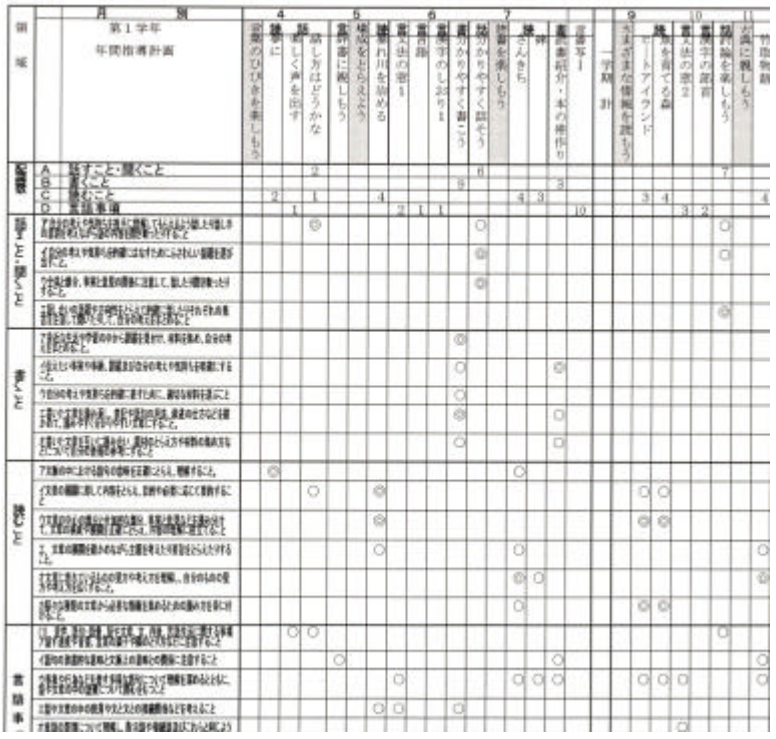
(ｲ) 指導計画について

指導計画は、どのような能力を育てるのかという目標を指導者が明確に認識しながら指導するための計画であるとともに、学習者自身が自覚的に獲得すべき能力を明確に把握して学習に取り組めるよう提示できるようなものでなくてはならない。

育成すべき言語能力も、自己コントロール力や自己肯定感の育成も、一つの単元で育成できるものではなく、年間を通した指導の中で総合的にはぐくまれるということを踏まえて、年間指導計画を作成しなければならない。

教師は、年間指導計画の中でいつ、どんな言語能力をどのように高めていくのかを明確にし生徒にも単元ごとの指導計画を示しながら、生徒による学習計画を立案させることが大切である。その中で、生徒自身がこの単元でどのような学習をし、どのような力をつけるのかという達成目標を明確に認識し、教師

【年間指導計画 例】



※自己制御学習：学習目標を達成するために、自己の認知と行動を学習者が自ら活性化させ維持する学習、すなわち学習過程を自分で制御する学習のこと。（辰野千尋「学習方略の心理学」1997年）

の授業計画を基に自己学習の進め方をデザインしていけるように援助していく。この研究では、２学期に行う三つの単元(三領域)において育成すべき言語能力を明確にし、主体的な言語活動を通して自ら学ぶ取組としやすい指導計画を作成し、自己コントロール力や自己肯定感を育成する手だてとしての「ステップ学習」を取り入れた。

イ　研究を進める工夫

国語科の授業では、「これができるようになった」「こんな力が身に付いた」という実感を感じることができにくい。このことが、国語嫌いを生んだり、国語の学習への意欲を阻んだりする要因の一つとなっている。また、自己肯定感を実感しにくく、投げ出したり、だらだら取り組んだりと学習のコントロールを疎外する要因にもなっている。

生徒に国語の力がついたのかどうかが曖昧で不明な授業を続けるのではなく、また、単に学習活動をしたという達成感や成就感を与えるだけではなく、確かな言語能力が身に付いたことを実感できる授業づくりに挑戦することが、今日的な国語科の大きな課題であり、本研究主題に迫ることであると考える。そのためには、次のような条件を備える学習計画を立てることが必要である。

・目標（身に付ける言語能力）が明確である
・目標とした力を発揮する自分の姿が思い描ける
・目標達成に向けて何をどうすればいいのか見通しがもてる
・目標とする力にどれだけ迫れているかを実感し、さらに手だてをもてる

そこで、自己制御学習の理論を用いて次のようにステップ学習を具体化し、取り組むこととした。

【ステップ学習の具体化】

三つの単元におけるステップ学習の進め方	第1ステップ	自己目標設定（なぜ学ぶのか、どのような力をつけるのか） ①学習目標の設定の具体例の提示 ②教師の設定するねらいに沿った生徒自身のねらいの設定、身に付けるべき言語能力の明確化 （例）この単元で何を学ぶのかの問い返し 学習活動における価値を見いだせるような働きかけ 設定単元における既得の学力と課題の把握 分かりやすく、挑戦しやすい目標設定
	第2ステップ	学習への方向付け（学習計画）と学習方法設定（どう学ぶのか） ①主体的な学習計画の作成 ②学習の見通しのもてる学習方法の把握 （例）学習をやり通す方法の発見、選択、習得 学習の見通しの確認と自己学習の設計
	第3ステップ	学習の振り返り（自己評価）→（学んだことをどう生かすか）は ①自らの学びを自己チェックし、メタ認知力、評価意識を育成 ②育成した言語能力を活用した言語活動 （例）自己チェック表の活用、自己評価表の活用

※評価意識：目的意識、相手意識、場面意識、方法意識、評価意識という言語意識の一つで、言語活動の過程及び結果がどうであったかを生徒に意識させること。

(7) 第１ステップ：自己目標設定（なぜ学ぶのか、どんな力をつけるのか）

はじめから生徒に「なぜ学ぶのか、どんな力を身に付けるのか」を問うても適切な答えが返ってくることは難しい。例えば「一所懸命取り組む」「漢字をすらすら書く」と抽象的で、曖昧な答えが返ってくることが多い。

生徒に自らの学習目標を設定させるためには、まず教師自身がどんな力をこの単元でつけさせたいかという思いを知らせていくことが必要である。そして、生徒自らが自分の言語能力を振り返りながら、提示された目標を自分の言葉で言い直したり、書き直したりすることによって自分自身の目標とするように迫ることである。そのとき大切なことは、教師が身に付けさせるべき言語能力をあれもこれもと示さず、焦点化して示すことである。様々な獲得能力を選択させる考え方もあるが、その手法は、初めのステップではなく、発展的な学習の中で活用したい。

【学習目標設定に焦点を当てた取組】
教師の指導目標提示
↓
生徒の振り返りによる自己評価
↓
生徒の個人目標の具体化

次に気をつけたいことは、生徒自身に目標設定する活動に意欲をもたせることである。「なぜそんなことをするのか分からない」という気持ちにさせるのではなく、目標設定に価値を見出せるような働きかけを行ったり、分かりやすく挑戦しやすい目標作りの方法を具体的に提示したりすることによって自分のための国語学習という認識を高めたい。また、目標の設定を自己目的化することのないように留意したい。

【実践事例１】

単元名「私たちのプロジェクト環境」
教材　－「ヒートアイランド」、「魚を育てる森」－

a　単元設定の理由

説明的な文章は、多様な視点からものごとをとらえ、順序立てて考えたりする論理的思考力を育成し、複数の説明的な文章から必要な情報を収集・分析・活用する情報活用能力を育成する上で有効な教材である。同時に、粘り強さや論理性を要素とする自己コントロール力をはぐくむ上でも重要な教材であると考える。

本単元は第１学年における二つ目の説明的な文章を読む単元である。ねらいとする言語能力「文章の中心の部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分けて、文章の構成や展開を正確にとらえ、内容の理解に役立てる」「さまざまな文章から、目的に応じて必要な情報を読み取る」を育成する上で中心となる単元である。

ここで取り上げる二つの教材は、どちらも環境問題をテーマにしたものである。「ヒートアイランド」は環境問題を都会の住環境的視点からとらえたものであり、「魚を育てる森」は自然保護的視点からとらえたものである。二つの文章を比較して読み、筆者の文章展開をもとに環境保護に対する迫り方の違いを読み取り、自分の考えを広げる学習の過程で、ねらいとする言語能力を育成したい。また、二つの文章をきっかけとして、環境問題について気付いたことを自分たちの問題として家庭に発信するために、様々な文章から必要な情報を収集し、説得力のあるパンフレットづくりを行うという目的を明確にした学習活動に取り組ませたい。

b　単元の目標

・文章の中心の部分と付加的な部分、事実と意見などを読み分けて、文章の構成や展開を性格にとらえ、内容の理解に役立てる。【Ｃ－ウ】

・さまざまな文章から、目的に応じて必要な情報を読み取る。【Ｃ－カ】

（【Ｃ－ウ】等の表記は学習指導要領の国語に示される領域・指導事項の記号であり、Ａ「読むこと・聞くこと」Ｂ「書くこと」Ｃ「読むこと」、ア～カは各領域の指導事項内容　以下同様に表記する。）

ｃ　単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
・学校図書館等を活用するなど、様々な種類の文章に応じた読み方をして内容を的確に理解しようとするとともに、進んで読書に親しみものの見方や考え方を広げようとしている。	・文章の中心の部分と付加的な部分、事実と意見とを読み分けている。 ・文章の構成や展開を的確にとらえ、内容の理解に役立てている。 ・様々な種類の文章から必要な情報を集めるための読み方を身に付けている。	・文章の中の段落の役割や段落内の各文の接続関係などを考えて読んでいる。 ・単語の類別について理解し、指示語や接続語及びこれらと同じような働きをもつ語句などに注意して読んでいる。

ｄ　単元指導計画（Ｐ.45～Ｐ.46参照）

ｅ　指導上の工夫・ポイント

①　「学習の手引き」による目標設定の作成

これまで生徒は教師から単元の目標を示され、それを確認することはあっても、生徒が自分自身の単元の学習目標をつくるということはしてこなかった。そのため、学習目標の作り方を、「学習の手引き」を活用して学ばせた。

まず、「学習の手引き」を使って、なぜこの単元で学ぶのかを考えさせるため、学習の価値を見出せる言語活動や育成すべき言語能力について説明した。

次に、これまで身に付けてきた説明的な文章を読む力と課題について振り返らせた。生徒は「要約文が的確に書けない」「段落の分け方がわからない」等、説明文に対する苦手意識を含む自己評価（診断的評価）をしている。

こうした振り返りをもとにして、育成すべき言語能力を、各自の現状を基準としてとらえ直させ、自分の言葉で表すことができるよう指導した。また具体的な例を用い、わかりやすく、挑戦しやすい目標設定となるように助言した。

ここで大切なことは、一人一人のワークシートに書かれた目標に教師の添削を加えることである。このことは、

単元名　「私たちプロジェクト環境」－環境パンフレットをつくろうう－（全７時間）

自己肯定感をはぐくむ視点を○、自己コントロール力をはぐくむ視点を★で表記

時	指導過程・指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価	自己肯定感をはぐくむ視点○ 自己コントロール力をはぐくむ視点★
3	**基本学習（課題把握）** ・単元の学習目標の把握と学習計画の作成	・**「私たちのプロジェクト環境」**の単元目標を確認し、学習計画表を作成する。	・**どのような目的で読むのか、どのような言語能力をつけるのかという視点**を明確にするために、学習の手引きを用意し、学習の見通しと目標がもてるようにする。	・自分が身に付けたい言語能力を明確にした学習目標をつくろうとしている。（関）	★学習の目標や計画を立てることで自己コントロール力の基盤をつくる。
	・「ヒートアイランド」の文章構成の把握と主題の理解	**「ヒートアイランド」** キーワード・キーセンテンス要約文をもとに、文章構成図を作り内容を理解する。	・**どのように読んでいくのかという視点**を明確にし、説明文の学び方の基本を踏まえたワークシートを用意し、確実な習得を援助する。	・文章の中心の部分と付加的な部分を読み分け、文章の構成や展開を的確にとらえ、内容の理解に役立てている。（読む）	★目的意識や方法意識を明確にして、じっくり読み取る姿勢をもつ。 ★２つの説明文を比較し、文章構成や展開を構成図や比較表にまとめる。
2	・「魚を育てる森」の文章構成の把握と主題の理解	**「魚を育てる森」** キーワード・キーセンテンス要約文をもとに、文章構成図を作り内容を理解する。	・前教材で学んだことを基に、説明文の学び方の基本に沿って、理解できるように援助する。	・文章の中心の部分と付加的な部分を読み分け、文章の構成や展開を的確にとらえ、内容の理解に役立てている。（読む）	○基本学習の内容を習得し、わかる実感や充実感を味わう。
1	・「ヒートアイランド」「魚を育てる森」の比較読みと意見の形成	・２つの文章を比較し、論の進め方や工夫、論旨などの相違点、共通点、特徴を整理する。	・文章構成や論旨を比較しやすいようにワークシートを用意して、後で取り組む課題学習に生かすようにする。	・２つの文章の特徴や筆者の考えの相違点を把握し、筆者の考えに対して自分の考えを明確にもつ。（読む） ・文章の中の段落の役割や接続関係などを考え読んでいる。（言）	○比較読みの目的を明確にし、共通部分と異なる部分を明らかにし、発見することのおもしろさに気付く。 ★２つの文章の相違点と同一点を明確にするため、筋道立てて粘り強く比較する。
1	**課題設定** ・比較読みを基にしたパンフレットづくり	・２つの文章に対する感想・意見の交流や様々な文章を参考にして、各グループでパンフレットのテーマを設定する。 例「宇宙船地球号の危機」 「私たちのふるさと地球を守る」 「インターネットの不安」	・**読んだことをどう生かすかという視点**をもたせ、各グループが資料を参考にしてテーマを設定できるように、環境にかかわる資料を揃えておく。 パンフレットづくりの方法を学習の手引きにより分かりやすく説明する。	・筆者の考えを踏まえ、自分の考えを深める。（読む）	○様々な疑問や意見をもつことを肯定的にとらえる。 ★より値打ちのある課題を考えようとする。 ○パンフレットのテーマを自己決定する。

時	指導過程・指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価	自己肯定感をはぐくむ視点○ 自己コントロール力をはぐくむ視点★
2	**応用学習** **課題追究** ・「環境パンフレット」の作成 ・広い範囲からの情報収集と意見形成 ・意図に応じた論理的構成と説得力ある表現構成	・「環境パンフレット」を作成する。 ①「環境パンフレット」の作り方を確認する。 ②グループごとに、様々な資料を基に調べ、環境パンフレットを作成する。 一人学び 自分のテーマに沿って資料を探す。 担当になった記事を資料をもとにつくる グループ学習 各自が集めた資料を取捨選択して有効なものを決める。 レイアウトを考え担当を決める 各自の記事を批正してパンフレットを作成する。 ③各グループの作成したパンフレットを相互評価する。	・パンフレットの作り方を全体で確認する。 ・相手意識、目的意識、場面意識、方法意識をもたせるようにする ・調べ学習がしやすいように参考資料の目録を作成したり、インターネット検索の援助を複数体制で取り組む。 ・ブレーンストーミングやＫＪ法で整理しやすいように構成したワークシートを用意する。 ・資料をただ写すのではなく、キーワードを生かしたり、主題を要約して分かりやすくまとめるようにする。 ・相互評価については、教師が示すものと同時に、評価項目を生徒同士で確認させる。	・パンフレットを作るため様々な情報を集めようとしている。 （関） ・様々な種類の文章から必要な情報を集めるための読み方を身に付けている。論理的な展開や構成をとらえ、内容を理解できる。・事実に基づき根拠を効果的に組み合わせ、論理的な構成を工夫し、自分たちの考えを説得力あるものにする。 （読む）	○自分たちの追究内容に価値付けし、自尊感情を高める。 ★パンフレットのテーマを粘り強く追究しようとする姿勢をもつ。 ★調べ学習のルールを守って調べ、学習に取りむ。 ★グループで話し合う際、お互いの意見を尊重しようとする。 ○テーマを自力解決する充実感を味わう。

（関）…国語への関心・意欲・態度　　（読む）…読む能力　　（言）…言語についての知識・理解・技能

教師にとって、一人一人に対する診断的評価をしながら、目標とする言語能力を育成するための個に応じた手だてを考えることにつながる。同時に生徒にとっては、学習目標作りがわかりやすくなり、学習への意欲を高め、言語能力を育成することが国語の学習であるという認識を形成することにつながると考える。

② 学習の手引きによる学習計画の作成

学習目標の設定の後、学習の見通しを生徒自身に把握させるようにした。ここでも「学習の手引き」を使って学習計画の作り方の具体例を示し説明した。この単元では見通しをもって学習に取り組むことの大切さを認識させ、自分の学習状況を客観的に把握するメタ認知の基礎的な部分を培おうとした。

説明的文章のキーワード、キーセンテンスのとらえ方、文章構成図の作り方を学び、二つの文章を理解した上で比較し、環境についての自分なりの考えをもち、家庭向けの環境ポスター、パンフレットを作成するという授業の流れを確認した上で、目標とする言語能力を育成するための自己学習計画を考えさせることが必要である。授業の流れを確認するだけでなく、自分の学習目標と対応させながら、自己学習計画を作成することが、自分自身の力を高めることにつながるという認識をもたせるよう工夫したい。

ここでいう自己学習とは、授業における自己の目標を意識した「一人学習」やグループ学習はもちろん、自宅学習や放課後を活用した個人の学習を含んでおり、一人一人が自分に適した自己学習計画をつくるように指導した。

f　生徒の変容

自分の力を振り返りながら目標を作ることは生徒にとって初めての経験であり、戸惑いもあったが、生徒の立てた学習目標には言語能力にかかわるもの、学習意欲や態度にかかわるものが含まれており、個々の生徒の実態を踏まえた目標づくりになっていた。

（生徒の作った目標の例）

・文章の段落わけや、要約が自分にとって不足しがちなので、そこの部分をがんばって、全体構成をつかんで作者のいいだしたいことを理解したい。

各自の目標を基にした学習計画に沿った学習も、主体的な学習の姿勢をつくることにつながり、自分の学習計画に沿った自己チェックも、各自の立てた目標を意識したものとなっていた。

（生徒の自己評価表より）

・自分の学習目標作りは初めてだったけど、自分で作ってみて、自分のどこが弱点かということがわかった。
・目標を少し意識して勉強すると、意識したことができるような気になった。
・学習目標を作ることは難しかったけど、自分のオリジナル目標は達成したいと思って取り組んだ。会心のパンフレットができてうれしかった。

（イ）第２ステップ：学習への方向付け（学習計画）と学習方法設定（どう学ぶのか）

学習者が自ら課題をもって取り組む総合的な学習の時間や教科の課題学習は、生徒自身による学習計画が比較的作りやすい。しかし、指導内容が明示されている教科学習では生徒自身による学習計画は作りにくい。教師が示す指導計画の確認や、それを基に学習集団としての学習計画を話し合い、全体としての計画を作ることはできるが、生徒一人一人が

自らの力を見据えたオリジナルな学習計画を立てることには慣れていない。その理由は、教師の指導計画以上の必要性を感じないこと、どう立てていいかわからないことなど多岐にわたると考えられる。そこで、自己学習を進めるための適切な学習計画を生徒自身に立てさせるためには、計画立案の必然性を感じさせさらに、どのように目標に迫ることができるかという見通しや手立てを具体的に把握させることが必要である。

【学習計画表　例】

授業の計画	私の学習計画	自己ﾁｪｯｸ	先生から
・教師の指導計画を示ししておく。(印刷しておく)	・授業の中で意識して取り組むこと。 ・自宅学習等の計画を記す	・学習の様子を簡潔な文章で記す。	・学習計画や自己チェックについて助言

第１ステップでは学習目標の設定と試行的な学習計画を作成させたが、なぜ学習計画が必要なのかという必要性を十分に認識させてはいなかった。

そこで、次の点を生徒に課題として、認識させながら具体例を用いて取り組むこととした。

・学習計画づくりの意義を確認し、自己学習「マイプラン国語」を設計する
・学習の見通しのもてる学習方法を把握する。

【実践事例２】

単元名「話し合いの名人になろう」
教材　　－「討論劇」、「なりきり討論」－

ａ 単元設定の理由

話す・聞く領域においては、段階的な指導が必要である。特に、中学生は思春期の揺れを示し、対話や討論において目的に沿った話し合いをスムーズに展開することは難しい。そのため、心の抵抗感を徐々に少なくし、話し合いのスキルを獲得していくステップを踏んだ「話す・聞く学習」を設定することが大切である。

第１学年では、１学期に行うスピーチの学習で、「場面設定スピーチ」「100秒スピーチ」に取り組んできた。この単元では、それらを踏まえ、話し合いの基本過程としてシナリオのある「討論劇」に取り組み、話合いに必要なことを確認した後、「討論ゲーム」的要素の強い「なりきり討論」を設定した。話合いのテーマと、テーマについて話し合う四つの立場（例えば母親、教師、高校生、町の人）を決め、自分とは違う第三者になりきることで心の抵抗感を少なくし、その立場に立って話のやりとりをすることで、ゲーム感覚で討論のルールやスキルを獲得し、話し合いの妙味を体験させるようにしたい。

また、話し合い学習の中でも、話した意見が認められることへの自信や自己肯定感を高めたり、相手の話を聴き、自己主張したり、抑制したり、修正したりするなど自己をコントロールする力を育成することを目指していきたい。

ｂ 単元の目標

・話合いの話題や方向をとらえて的確に話したり、それぞれの発言を注意して聞いたりして、自分の考えをまとめる。　【Ａ－エ】

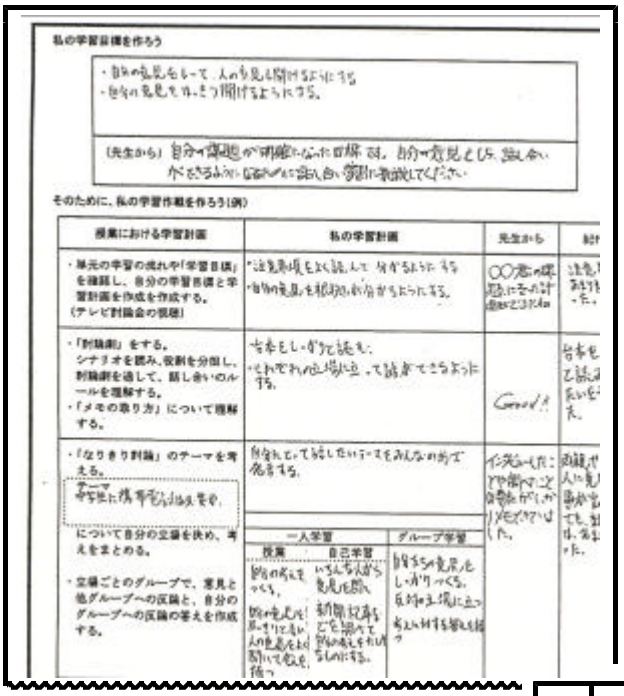
c 単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	話す・聞く能力	言語のついての知識・理解・技能
・身近な生活における話題について関心をもち、自分の考えを進んで話そうとしたり相手の話を的確に聞き取ろうとしたりするとともに、話し言葉を大切にしようとしている。	・自分の気持ちや考えを相手に理解してもらえるように話したり、話し手の意図を考えながら話の内容を聞き取ったりしている。 ・話合いの話題や方向をとらえて的確に話したり、それぞれの発言を注意して聞いたりして、自分の考えをまとめる。	・話す速度や音量、言葉の調子や間の取り方などに注意して話したり聞いたりしている。

d 単元指導計画（P.50参照）

e 指導上の工夫・ポイント

① 自己評価(診断的評価)を踏まえた学習計画の作成



この単元では生徒自身の学習計画をつくる意義を認識させることを大切にした。

自分の力の的確な把握が行われる時、当然のことながら、自分なりの学習の必要性を感じ、オリジナルな計画をもつことの必然性も認識できる。

まず、「討論劇」「なりきり討論」などの言語活動で、自分がどんな姿になりたいかをイメージし、目標を設定するようにした。テレビの討論会のビデオや教師の自作「討論劇」ビデオ等を見せてイメージをもたせた。このことが、学習の見通しの具体化にもつながった。また、診断的自己評価を行わせ、それに基づいたチェックリストを作成し、一人学習の計画を立てるようにした。同時に「なりきり討論」では、自分の立場を明確にした主張作りも計画に位置付けるようにした。中学生になって初めての話合い学習であることから、学級活動等日常の話合いを診断的自己評価の材料として考えさせた。

話合い学習は、集団と個人のかかわりが強く、一人学習を含む学習計画を立てにくいと考えられるが、学習の流れや「仲間と学ぶ」「一人で学ぶ」という特性を生かし、互いの機能を有効に活用した二重構造の計画を

時	一人学び計画		グループ学習計画
1	・自分の立場を決める		・立場ごとに集まる立場の主張をまとめる手だてを話し合う。
	授業	自己学習	
2	・自分の考えをメモする。 ・他への質問やへの応答を用意する。	・自分の考えをまとめるため新聞や周囲へのインタビューをし、要点をメモする	・各自のメモをもとにグループの主張や質疑応答メモを作る。

単元名　「話し合い名人になろう」－討論を楽しもう、なりきり討論－（全６時間）

自己肯定感をはぐくむ視点を○、自己コントロール力をはぐくむ視点を★で表記

時	指導過程・指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価	自己肯定感をはぐくむ視点○ 自己コントロール力をはぐくむ視点★
3	**基本学習**（課題把握） ・単元の学習目標の把握と学習計画の作成 ・「討論劇」の流れの把握と学習方法の理解	・「話し合い名人になろう」の学習の流れを確認し、単元目標と学習計画表を作成する。 「討論劇」 ・討論劇のシナリオを読み、役割を分担し、討論劇を通して話し合いのルールを理解する。 ・「メモの取り方」について理解し話し合いを円滑に展開するために必要なことをメモする。	・どのような目的で話合いをするのか、どのような言語能力を付けるのかという視点を明確にするために、学習の手引きを使い、学習の目標と計画を立てられるようにする。 ・どのように話し合いの学習をするのかという視点を明確にし、話し合いの基本を討論劇を通し学習の手引きによって確認させる。 ・討論をロールプレイさせ、討論に必要なことを確認させ、自己評価・相互評価させる。	・自分の付けたい話す・聞く能力を明確にした学習目標と計画をつくろうとしている。（関） ・話し合いの話題や方向をとらえた話し合いの仕方を理解している。（話す・聞く）	★学習の目標や計画を立てることで自己コントロール力の基盤をつくる。 ★目的意識や方法意識を明確にして、話し合いの仕方を形成する。 ★論点やキーワードを考えながら、粘り強く聞く。
2	**応用学習**（課題設定） ・「なりきり討論」の流れの把握と学習方法の理解	「なりきり討論」 ①「なりきり討論」のテーマとテーマについての討論に必要な立場を決める。 ②同じ立場を選んだグループごとに主張と予想される反論を作成する。 一人学習：立場を決める／自分の主張をメモする／質問・応答の予想を考える グループ学習：同じ立場のグループで集まる／互いの主張を基にグループの主張や質疑応答をまとめる。	・「討論劇」の学習を踏まえ「なりきり討論」用の学習計画を追加修正させる。 ・取り組みやすく必要性を感じるテーマを数例を提示し、生徒が付け加え、その中から絞らせる。 ・討論に必要な立場を決める時、決めた理由を明らかにさせ、討論のポイントを把握するよう促す。 ・ブレーンストーミングやＫＪ法で整理しやすいように構成したワークシートを用意する。	・話し合いの話題や方向を捉えて的確に話したり、それぞれのテーマに沿って、自分の考えをまとめている。（話す・聞く） ・説得力ある話にするため語句の使い方に注意している。（言）	★前時の自己評価や相互評価を基に学習計画を修正する。 ○自分たちの立場や主張を価値付けし、自尊感情を高める。 ★グループで話し合う際、お互いの意見を尊重しようとする。
1	（課題追究） ・「なりきり討論」のテーマに沿った話合い	・コーディネーター役を決め、テーマ「中学生に携帯電話は必要か？」について四つの立場(母親、高校生、教師、会社員)に分かれて話し合う。 ①各グループから発表 ②各グループからの質疑応答 ③各グループからの反論 ④個人の自由な意見交換 ・「なりきり討論」を振り返える。	・グループの全員が、それぞれの立場を明確にして、順序立てて、根拠をあげながら話すように助言する。 ・用意した発言内容だけを言い合うのではなく、互いの主張の要点や比べながら発言したいことをメモして聞き、積極的に発言するように促す。 ・「なりきり討論」をビデオに撮り、振り返りに用いる。	・話し合いの話題や方向を捉えて的確に話したり、それぞれの発言を注意して聞いたりして、自分の考えをまとめている。(話す・聞く) ・話す速度や音量、言葉の調子や間の取り方などに注意して話したり聞いたりしている。（言）	★分かりやすい発表にするために、意見と根拠を明らかにし、話し合う。 ★互いの主張の違いを聞き分け、自分の考えを分かりやすく話そうとしている。 ○テーマに沿った話し合いをやり遂げることへの達成感や充実感を味わう。 ○自分たちの話し合いを目標に沿って振り返り、よさを見付ける。

（関）…国語への関心・意欲・態度　　（話す・聞く）…話す・聞く能力　　（言）…言語についての知識・理解・技能

立てることが大切である。

グループ学習の基盤には「一人学習」が必要である。話し合いに必要な自分の立場を決め、「自分の考えをもつ」ための一人学習の計画と手立てをもたせるようにした。

一人学習計画は授業中の学習と放課後や家庭学習に分け、学習の進め方の全体を明確にした。自己学習で解決できないことはＳＯＳサインを書き、「仲間とともに学ぶ」時間で解決し、作戦タイムの活動やなりきり討論本番での協力的な運営を図れるように工夫した。

②「学習の手引き」による学び方の習得

学習計画に沿った自己学習を進めるとき、「どのように学ぶのか」という学び方を身に付けていくことが必要である。話合いの力を高める学び方が具体的にわかりにくいという生徒のために、「討論劇」を通して話合いの仕方のポイントに気付かせ、「学習の手引き」を使って話し合いの基本例（討論の始め方、質問の仕方、メモの取り方、話のつなぎ方）を示し、具体的な話し合いの展開をイメージできるようにした。

また、速記のようなメモではなく、キーワードやそれに対する自分の意見を記録するメモの取り方を練習させた。

テーマを決めた「なりきり討論」では、自分の立場を主張するために必要な材料を様々な資料から集める調べ学習を積極的に行わせるようにした。調べ学習については、前単元で学習したようにインターネットによる情報、インタビューによる情報、新聞や雑誌、図書などの情報を活用し、事実と意見を色で区別したカード（付箋紙）にまとめる方法をとった。このカードを組み合わせて、ツリーマップ（カード相互の関係を表す全体図）を作り、グループの考えをまとめさせるようにした。

更に話合い学習のための「学習の手引き」も作成し、「なりきり討論」の進め方を具体例で示し擬似体験をすることで体得させたり、自己課題チェックリストによって課題を確認したりしながら学習を進められるようにした。

ｆ　生徒の変容

診断的評価として、日常の学級活動での話し合いを振り返らせたことは、生徒に切実感をもたせることになった。また診断的評価に基づいて立てた学習計画は、生徒に意識的な話し合いを促すことになった。また、「仲間と学ぶ」「一人で学ぶ」という二重構造の計画を立てることによって、生徒一人一人が「今何をすべきか」を自覚的に考えることができるようになってきた。さらに、「討論劇」を終えた段階での自己評価を「なりきり討論」の学習計画に生かし、修正を加えたため、より実用的・実際的な計画に近づいた。

（生徒の自己評価表より）

・自分の意見をはっきり言うことを意識した。人の意見をメモを取りながら一生懸命聞いて、自分の考えをまとめたり、グループの主張をまとめようとがんばった。
・話すことは苦手だけど、話し合いの勉強の仕方が分かったし、討論劇や立場になりきって話すことは楽しかった。先生のお助けカードは助かった。

実際の討論では、自己評価の低い生徒も、役になりきることで日常の学級活動の話合い以上に討論に参加することができた。しかし、やりとりが深まるにつれ、聞き手に回りがちな生徒が固定化してきたことは課題となった。こうした生徒への手立ては、評価規準を作成する際にも重要である。ここでは、状況に応じて、

お助けカード：今のあなたに一言

グループの全員が参加できるように作戦タイムを設定し、意欲付けのための励ましやポイントを示す「お助けカード」で援助した。

なりきって話し合うことやグループで助け合うことで、話合いの充実感をもつことができ、自己肯定感につなっがたと考える。また、自己学習計画を立て、自己チェックすることで自己の学習をコントロールしようとする力を意識した取組を行うことができた。

(ｳ) 第3ステップ　学習の振り返り（自己評価）→（学んだことをどう生かすか）

自己学習の大切なところは、学習を振り返り、メタ認知的に自らデザインした学びの過程をチェックし、課題を明確化することによって学習を自らコントロールしたり、達成感や成就感などの自己肯定感を実感したりすることである。

与えられた目標と計画に沿った形式的な自己チェックではなく、自ら設定した目標や計画に対する振り返りは、生徒自身にとって切実感のあるものである。目標に沿って学んだ状況を的確に把握し、達成したことやできなかったことについて学習のどの過程や方法に課題があったのかを理解することで、学びの修正や批正ができる。

このように学びの自己評価は、育成すべき言語能力に対しての達成度や状況を明らかにするとともに、学びの再構成のために重要である。こうした学ぶ過程や学習後の自己評価をどう生かしていくのかという視点が大切である。評価を生かした個に応じた学習の充実を図るとともに、生徒自身が自ら振り返ったことを基に、教師の示唆的な指導により自己学習の手だてや発展的内容をともに考える姿勢が必要である。生徒の主体性と教師の指導性をこうした場面でつなげていくことが教師との信頼関係を築くことにもつながると考える。

そこで、次のポイントを生徒に意識させながら、具体例を用いて取り組むこととした。

・学習計画に沿って自己評価し、学習計画の修正をする。
・学んだことを生かす学習活動を設定し、伝え合う力を高める。

【実践事例３】

単元名「根拠示して伝え合おう」
教材　－「説得ボクシング　」、「学級生活改革への提言」－

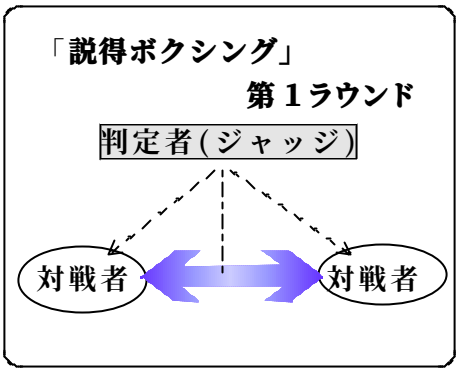
ａ　単元設定の理由

書く領域の指導になると、「何を書いていいかわからない」「どう書いていいかわからない」という発言が必ず数人の生徒から出てくる。

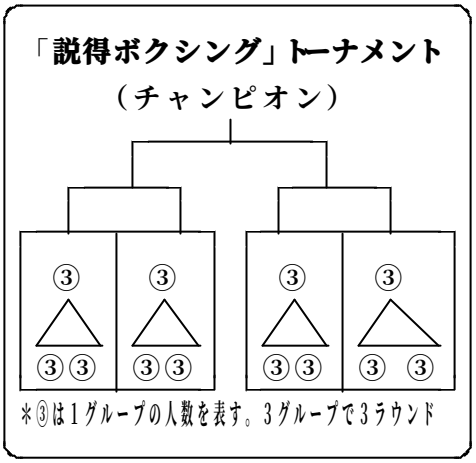
こうした生徒たちには、何のために、どんな文章を、どう書けばいいのかを具体化する学習が必要である。第１学年の書くことの目標に示されている「必要な材料を基にして自分の考えをまとめ、相手や、目的に応じ、叙述の相方などを確かめて、読みやすく分かりやすい文章を書く」力を育成するための学習を設定する時、教師は生徒自身が書く目的と方法を具体的に把握し、書く力の具体的な目標を把握して取り組ませるようにすることが

必要である。

ここでは、「社会の中で、自分の考えを主張していくために周囲を論理的に説得できる文章を書けるようになる」ことを目的として、「選択テーマに沿って、短い文章の中で、二つ以上の根拠をあげて説明する文章を書く」「序論、本論、結論の流れで書く」ことを要件とする学習を設定した。また、「説得力のある文章になったか」については、生徒同士の相互交流・相互評価によって確かめていく「説得ボクシング」という方法を用いて取り組むようにした。



「説得ボクシング」とは、三つのグループ(１グループ３人)が交互に判定者、対戦者となり、説得力のある文章を多く出したグループが勝者となるという方法である。判定者も、なぜその判定をするのかという根拠（判定基準）を示すことになり、対戦者、判定者いづれの立場に立っても根拠を示して説得するという言語活動が必要になる。



この学習を通して、自分の判断の正しさを証明したり、自分の判断を主張したりするときには、必ず根拠を示すこと、また、他者の示した根拠については、それが正しい根拠に基づくものかを注意深く検証するという論理的思考力の根幹を培うことができる。留意点としては、相手を負かすことより、対戦相手の根拠の確かさを認める態度や、自分たちの立論の妥当性を再確認する姿勢を尊重することに注意を促したい。形式的にはボクシングのような勝ち負けであるが、伝え合う力を育てるためには言葉の確かさ、明確さを互いに確認することが大切なのである。この認め合いが他者の尊重や自己肯定感につながると考える。さらに、順序立てた思考、根拠の明確な判断などの論理的思考力は、自己コントロール力の育成につながるものと考える。

b　単元の目標

・伝えたいことの根拠となる材料を選んで書き、自分の考えをまとめている。

【Ｂ－ア】

・根拠を明らかにした文章を書くために、事実や事柄、自分の考えを明確にしている。

【Ｂ－イ】

c　単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語のついての知識・理解・技能
・身近な生活から必要な材料を集めて、自分の考えをまとめようとしたり、進んで書き表そうととしたりしている。	・伝えたい事実や事柄、課題、自分の考えや気持ちを明確にしている。 ・課題に関する材料を集めそれを基にして自分の考えをまとめている。	・文章の中の段落の役割や段落内の各文の接続関係などを考えている。 ・単語の類別について理解し、指示語や接続語及びこれらと同じような働きをする語句などに注意して書いている。

単元名　「根拠を示して伝え合おう」－説得ボクシング、学級生活改革への提言－

自己肯定感をはぐくむ視点を○、自己コントロール力をはぐくむ視点を★で表記

時	指導過程・指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価	自己肯定感をはぐくむ視点○ 自己コントロール力をはぐくむ視点★
3	**基本学習**（課題把握） ・単元の学習目標の把握と学習計画の作成 ・「説得ボクシング」の流れの把握と学習方法の理解	・「説得ボクシング」の学習の流れを確認し、単元目標と学習計画表を作成する。	・どのような目的で書くのか、どのような言語能力をつけるのかという視点を明確にするために、「学習の手引き」を使い、学習の目標と計画を立てられるようにする。	・自分の身に付けたい書く能力を明確にした学習目標と計画をつくろうとしている。（関）	★学習の目標や計画を立てることで自己コントロールの基盤をつくる。
		「説得ボクシング」 ・３つのテーマに沿って個人で根拠を示す作文を書く。 ・各グループで説得力ある作文を練り上げる。 ・3グループ(対戦者、判定者)で説得ボクシングのリーグ戦をし、その後トーナメントでチャンピオングループを決める。	・どのように書いていくのかという視点を明確にし、テーマに沿って書かせる。 ・一人の作文を選ぶのではなく、各グループで確かな根拠のある文を作り上げるよう助言する。 ・学習の目標を基に、判定基準を話し合うようにさせる。 ・トーナメントになると判定者のが多くなるが、判定者としての認識をもたせ取り組ませる。	・伝えたい事実や事柄、課題、自分の考えや気持ちを明確にしている。（書く）	★目的意識や相手意識を明確にして書く方法を確認する。 ★「説得ボクシング」に勝つために、根拠や論点を明らかにして粘り強く書く。 ★判定基準に即して正確に判定する。 ○根拠を明らかにして自分たちの文が適切な判定を受ける。
2	**応用学習**（課題設定） ・「意見を聞かせて－学級生活改革－」の流れの把握と学習方法の理解	「学級改革への提言　－君の意見を聞かせて－」 ①意見文を作成する方法(序論,本論,結論の組立て方)を学ぶ。 ②「学級生活改革」をテーマにして自分の主張を決め、構想メモをつくる。 ③構想メモを「説得ボクシング」の判定基準を参考にして、ペア学習でアドバイスし合う。	・「説得ボクシング」の自己評価を踏まえ、学習計画を追加修正させる。 ・「学習の手引き」で意見文の書き方(序論,本論,結論の組立方）を確認させる。 ・「学級生活改革」のテーマに沿った主題、構想メモづくりには一人ブレーンストーミング、ＫＪ法などを活用し、根拠を複数用意するように助言する。 ・互いの構想メモに対して適切にアドバイスするように指示する。	・身近な生活や学習の中から課題を見付け、材料を集め、自分の考えをまとめている。（書く） ・単語の類別について理解し、指示語や接続語及びこれらと同じような働きをする語句に注意して書いている。（言）	○自分の追究内容を評価し、自尊感情を高める。 ★調べ学習のルールを守って調べ学習に取りむ。 ★ペアで話し合う際、お互いの意見を尊重しようとする。
1	（課題追究） ・「学級生活改革」のテーマに沿った意見文作成と自己評価	・書き方を確認しながら、構想メモを基に、主張の根拠を二つ以上挙げ、意見文を作成する。 ・作成した意見文を判定基準や意見文の書き方を踏まえて自己評価する。	・主題を支える適切な根拠を二つ以上挙げ、事実と意見を明確に区別して書くように助言する。 ・「書き方の学習の手引き」やジャッジ用判定基準を基に自己評価規準を作成させ、これまでの学習を振り返らせる。	・伝えたい事実や事柄、課題、自分の考えや気持ちを明確にしている。（書く）	★意見文のテーマを粘り強く追究し、最後まで適切に表現しようとする姿勢をもつ。 ○テーマを自力解決する充実感を味わう。

（関）…国語への関心・意欲・態度　　（書くこと）…読む能力　　（言）…言語についての知識・理解・技能

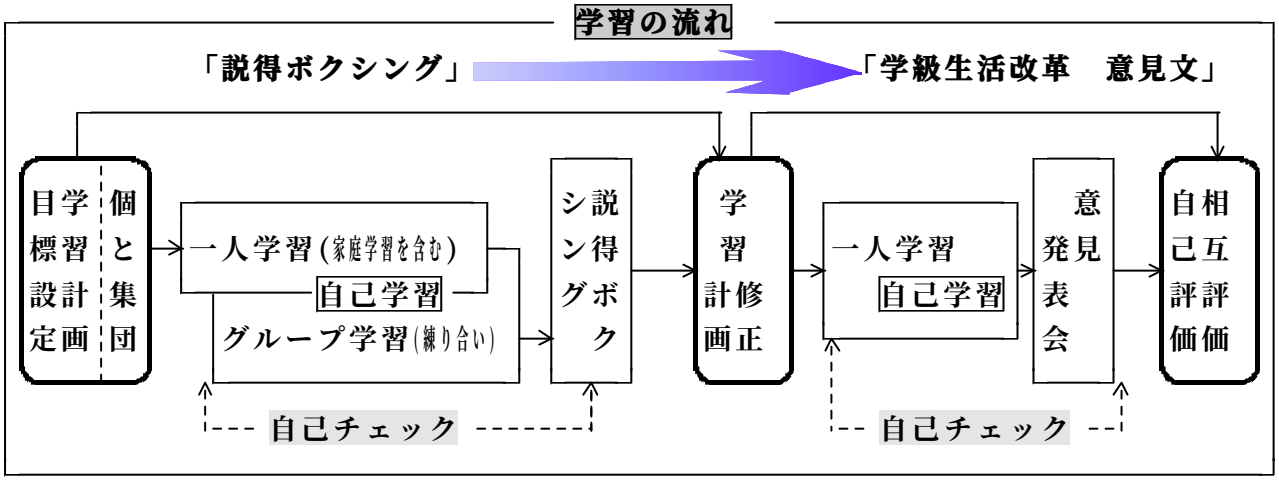
d 単元指導計画（P.54参照）

e 指導上の工夫・ポイント

① 学習計画表と学習の振り返り（自己評価）

この単元では、書いた文章の説得力を比べ合うゲーム性のある学習「説得ボクシング」を設定し、生徒に興味をもたせ、分かりやすい文章を書く動機付けとなるようにした。また、単に興味ある活動だけに終わらないよう、書くことへの意欲を高める工夫や説得力ある書き方を身に付けられるよう工夫した。

初めに、伝え合う視点を大切にした個と集団の学習計画を作成した。個（自己）の学習では、五つの言語意識「目的意識、相手意識、場面・状況意識、方法意識、評価意識」を明確にし、説得力のある根拠を二つ以上示すことに取り組み、集団での学習では各グループで代表作文を練り上げ、他のグループと競い合うようにした。



１回戦後、互いに学習のチェックを行い、他グループから学びながら、言語意識の明確さ、根拠の確かさ、練り合いの深さを点検し、再構成させた。

「説得ボクシング」ゲームの判定者は対戦外のグループとし、互いに認められることの喜びと、次のラウンドこそ勝って認められようとする努力や意欲を高めた。また、確かな判定をするために、伝え合う力を互いに評価する観点について話し合い、評価能力を高め自己評価にもつながるようにした。

学習計画の横にある自己チェック表には一言コメントを文章で書き、学習のまとまりごとの自己評価表(右)は基本評価項目を教師が設定し、自分で付け加えたい項目を書き込めるように空欄を設けた。さらに、教師の一言コメントの欄には、励ましと助言を書き込むようにした。根拠のある文を競い合うことで相手や判定者にわかりやすく伝える文が書けたという達成感を味わわせたり、自己評価することで学びを修正したりして、自己コントロール力や自己肯定感を高めるようにした。

自己評価表　（　）組（　　）

評価項目	評価
自分の考えをまとめられた	a b c
伝えたいことの根拠が明確である	a b c
適切な材料を集めて構成している	a b c
適切な表現や指示語を使っている	a b c
段落の構成が分かりやすい	a b c
プラスα評価項目	
	a b c
	a b c

一言感想

先生から

② 学んだことをどう生かすか

「説得ボクシング」というゲーム的な学習を、必然性のある学習につなげるため、「一年○組意見文大会－君の意見を聞かせて－」を設定した。テーマは、「学級生活改革」とし、題材を身近な生活や学習に求めさせた。選材活動では、一人ブレーンストーミング、一人ＫＪ法で整理した構成マップをペア学習で交流し、批正や修正をさせながら説得力をもたせるようにした。その際、「説得ボクシング」で自己評価したよさや課題を踏まえて、自己の学習計画を修正させるようにした。

ここでは、学習を振り返り、自らデザインした学びの過程をチェックし、課題を明確化することによって学習を自らコントロールすることが大切であると考えたからである。「説得ボクシング」という基本学習で身に付けた言語能力を生かす視点と、その自己評価や相互評価を生かす視点を「一年○組意見文大会－君の意見を聞かせて－」という応用学習にも位置付け、心に思っていたことを「学級生活改革」という名前のもとに表現する意識付けを行った。言語能力は実の場に生かすことで一層鍛えられる。実の場としての学習場面を設定するとともに、基本学習で学んだことをどう生かすかを、生徒自身が意識して取り組み、達成感や成就感を味わうことで自己肯定感を実感できるよう指導していくことが大切である。

ｆ 生徒の変容

「何を書いていいか分からない」といっていた生徒も、ゲーム性のある説得ボクシングには非常に意欲的に取り組んだ。相手、目的、場面、書き手の立ち場を明確にし、書く方法をゲーム的に身に付けさせていくことで、書くことへの抵抗感は少なくなっていった。

自分の考えた根拠をもとに練り上げた文章が勝ち残れたことや、書くことへの抵抗感が少なくなったことに、生徒は自己肯定感を感じている。また、応用学習を設定することで、自己評価したことを生かしたり、他のグループのよさを学ぼうとしたりして、意欲的に学習をコントロールしようとする力が働いたと考える。

（生徒の自己評価より）

・説得ボクシングはおもしろかった。自分で考えた根拠が、グループの話し合いで採用されて２回戦も勝ち残れてうれしかった。
・みんな生き生きしていた。勝ち残ったグループの文章は、やっぱり説得力があり参考になった。こんな学習はまたやってみたい。
・説得ボクシングより意見文の方がしんどかった。でも、いつもより作文を書くのがいやではなかった。相手を説得する書き方が少し分かったような気がする。

※ブレーンストーミング：オズボーンが考案した思考法、創造的なアイディアを開発するための手法。思いついくままに批判も評価もせず多くのアイディアを発想し、リストアップする。

※ＫＪ法：川喜田二郎氏が考案した発想法、課題解決のため、自分の考えをカードに記入し、類似したものをまとめて、新しい解決方法を考える。

(3)　研究の成果と課題

ア　研究の成果と課題

(ｱ) アンケート結果より

３ヶ月にわたって３つの単元で、研究授業を取り組んできたが、その前後に国語及び自己コントロール力・自己肯定感に係るアンケートを実施し、その変化を検証してみた。

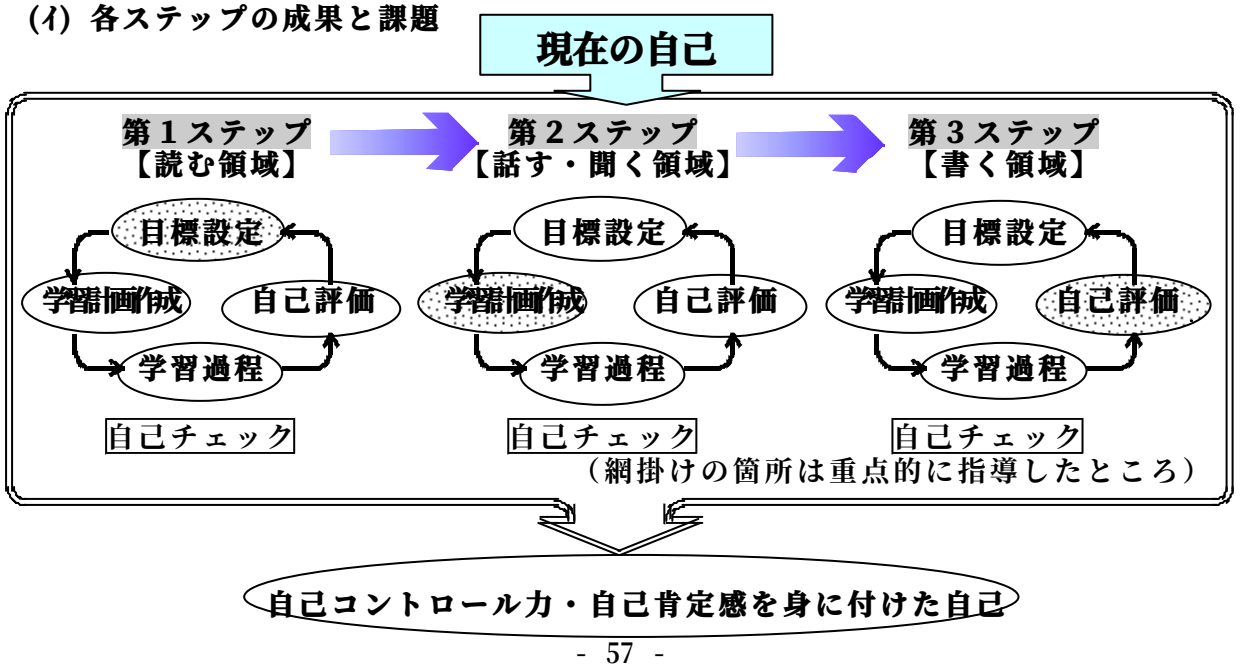
（アンケートより抜粋）　（２学級　７６名）

アンケート項目			事前アンケート	事後アンケート
自己コントロールと自己肯定感の項目			ＹＥＳの回答率	ＹＥＳの回答率
自分が好きか			２３．９％	３３．０％
自分に自信があるか			１４．５％	１４．７％
授業中、自分のよさを発揮できているか			１３．２％	１３．４％
自分の考えが受け入れられているか			１０．８％	１２．９％
友だちのよさにふれると向上心をもつか			４０．５％	４６．９％
達成できそうにないとあきらめやすいか			３８．２％	３７．６％
国語に関する項目			ＹＥＳの回答率	ＹＥＳの回答率
話し合いが好きですか			４４．７％	５２．９％
文章を書くことが好きですか			２９．８％	３２．５％
文章を読むことが好きですか			５０．６％	５９．１％
国語の学習は好きですか			３８．１％	３９．５％
理由	きらい	学習方法がわからないから	２０．５％	１６．７％
		覚えることが多いから	２５．６％	２６．２％
		読書や作文がきらいだから	２４．５％	１９．６％
理由	好き	答えが一つでないから	１８．１％	１９．９％
		自分にとってためになるから	９．８％	１１．６％
		読書や作文が好きだから	１３．９％	１４．８％

その結果、自己コントロール力と自己肯定感について、事前・事後のアンケートを比べると若干ながらその数値に変化が見られた。学校生活の他の要因からの影響も考えられるものの、「自分が好き」であることが10％増えていることは一つの成果と考えられる。また、他の項目もわずかであるが、自己コントロール力や自己肯定感にかかわる高まりが見られた。国語に関する項目については、どの領域においても「好き」という回答が増加している。

教科学習と自己コントロール力・自己肯定感の関係をアンケートから直接に結び付けることはできないが、３つの領域とも微増を示していることから、何らかのかかわりが窺える。また、学習方法の理解や学習の必要性の把握が、教科への好悪に影響していることを鑑みると、これらが、自己コントロール力や自己肯定感の要素の一つとして考えられる。

(ｲ) 各ステップの成果と課題



【第１ステップ　学習目標設定（読む領域の実践）】

１学期までの学習を振り返り、診断的自己評価を正確に行うことは難しい面があり、主観的・抽象的な目標設定になる面は否めなかった。しかし、教師の示すめあてだけを表面的に確認するのではなく、「なぜ、学ぶのか」と自己の中で咀嚼した目標であるだけに、誰のものでもないオリジナルで主体性のあるものとなった。目標を自分の側に引き寄せることによって学びが切実感を帯び、学習への意欲を高め、自己学習の遂行をコントロールすることにつながったと考える。

今後はポートフォリオ的に読む能力の把握を入学時から行い、各単元の学習に入る前に生徒自身が客観的な診断的自己評価を行えるようにする必要がある。同時に目標設定についても、入学時から取り組み、定着を図りたい。

【第２ステップ　学習計画・学習方法の設定（話す・聞く領域の実践）】

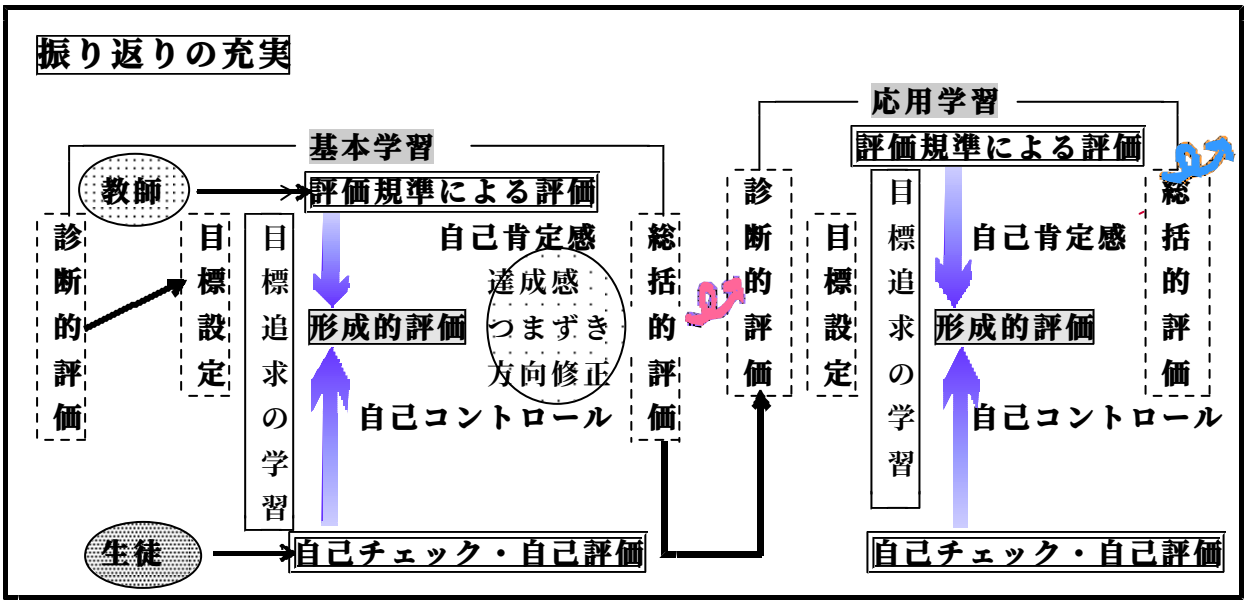
「なりたい自分の姿」をイメージさせたり、日常の話し合いを振り返えらせたりして目標を設定し、基本学習を応用学習（実の場に近い「なりきり討論」）へと発展させたことで、生徒に必然性を感じさせ、「どのように学ぶのか」を具体化する学習計画作成・修正に取り組むことができたと考える。

今後、自己学習計画を立てさせる際留意すべきことは、授業の流れやその中で一人学習、グループ学習、一斉学習等の位置付けを認識させ、いつ・どこで・どんな学習方法が適切かを考えさせることである。

こうした主体的な学習計画を基にして身に付けられた言語能力は、自己効力感を実感できるものであり、目標に十分達成できない場合は、学習計画や学習方法を検討し、コントロールすることを示唆することが大切である。

【第３ステップ　振り返りの充実（書く領域の実践）】

第３ステップでは、自ら設計した学習の過程を形成的評価を行わせることで、成果と課題をチェックすることができ、学習を修正しコントロールするメタ認知的活動に取り組ませることができた。



振り返り活動で大切にしたことは、自己チェックにしろ、自己評価にしろ、自己評価能力を高めることである。適切な評価が適切な自己肯定感やコントロール力を生むものであることから、過大評価や過小評価のないものにするため、評価項目を生徒自身に考えさせたり、自己チェック表や自己評価表に教師からコメントを書く欄を設定したり、相互評価を取り入れたりして評価能力を高めるようにした。学習過程における評価規準をもとにした適切な助言や手だてによって客観性を獲得させるようにすることも大切である。

今回の実践は、第１学年の２学期の取組であり、「話す・聞く」「書く」「読む」の三つの領域で、目標設定、学習計画、自己評価についてそれぞれ重点的に取り組んだものである。異なる領域における目標設定、学習計画、自己評価においても、成果を見ることはできたが、今後は、同じ領域で目標設定、学習計画、自己評価の重点指導を段階的に繰り返し、一年間を通じてどの領域においても自己学習のデザインを身に付けられるようにすることが必要である。

イ　授業改善への提言

一単元の学習サイクルの要素には「Ｐ（plan　目標設定、計画立案）・Ｄ（do 計画の実施）・Ｃ（check 実践状況の評価、振り返り）・Ａ（action 改善案の策定）」がある。この実践的研究でも、このサイクルを大切にして取り組んできた。

特に、第２年次から授業実践では、自己コントロール力をはぐくみ、自己肯定感を実感できる学習を目指し、このサイクルの「Ｐ」と「Ｃ」に当たる「(2) 目標設定、見通し（学習計画）、振り返りの評価活動を充実する学習」を中心にその具体的な在り方を探ってきた。

自己コントロール力や自己肯定感は、生徒自身の行為や行動を通してはぐくまれるものであるから、この場合の目標設定、見通し(学習計画作成)は、教師だけが行うのではなく、生徒自身も主体的に取り組み、教師と生徒が互いにもち合うことが大切であると考える。

同時に、学習の振り返りも、教師と生徒がそれぞれの立場から共に行い、指導の改善、学習の改善に役立てたいものである。

つまり、Ｐ・Ｄ・Ｃ・Ａの過程を、生徒自身が考えながら学習するこのような一連のプロセスが、自己コントロール力や自己肯定感をはぐくむ「自己学習システム」であると考える。

このシステムに基づく学習は、総合的には次のような効果をもつものと考える。

○ 自分の学習をデザインすることで生徒自身に主体的な学習の姿勢を身に付けさせる。
○ 自己診断的評価を踏まえ、生徒自らが目標設定することで、自己をよりよく理解させ、自己コントロール力や自己肯定感をはぐくむ基盤をつくる。
○ 自己学習計画に基づき学習過程を自己チェックすることで、学びをコントロールする力を高める。
○ 自己学習計画に沿って自己チェックし、学びを修正したり、学び方を身に付けたりすることで自己効力感を高め、自己肯定感を実感できる。

※自己学習システム：学習場面における自己強化あるいは自己評価反応によって、自己の学習行動を調整する一つのフィードバックシステムと定義することができる（石田勢津子「自己学習システムの機能と役割」平成７年）

この学習システムを活用して、授業改善に取り組む方法を次のように考える。

○なりたい自己（育成すべき言語能力を付けた自己）のイメージをもたせ、目標設定につなげる。（目標設定の内面化）

○自己学習（自分の目標を設定し、自分の学習計画を作成し、自己チェック、自己評価する学習）の認識を明確にする。

○年間指導計画の中で育成すべき言語能力を明確化し、各単元ごとに学習の流れを事前に生徒に提示する。（シラバス作り）

○入学時からセルフコントロールのステップ学習によって、１年間を見通して３領域全てに段階的に学習の設計を行う。

第１ステップ　目標設定(なぜ学ぶのか)
第２ステップ　学習計画設定（どう学ぶのか）
第３ステップ　自己チェック・自己評価（学びの振り返り）

- 各学期ごと重点を置く
- 各領域毎に継続的網羅的に行う
- １年間・全領域を通して行う
- １年間を通して螺旋的に高める

自己コントロール力・自己肯定感育成の年間構想図

【目標設定等については網掛けの部分が学期ごとの重点】

○個と集団、授業と自主学習など学習場面や見通しを複線的にとらえ自己学習計画を設定できうようにする。
（学習計画の構造化）

○言語意識(相手意識、目的意識、場面意識、方法意識、　評価意識)を明確にし、必然性を感じさせる言語活動を設定する。

○身に付けるべき言語能力を育成するための主体的で多様な言語活動を設定する。

○三つの領域全てにわたって、目標設定、学習計画、振り返りにそれぞれに段階的に重点を置くステップ学習を位置付けていくことによって、言語能力はもちろん自己コントロール力や自己肯定感を螺旋的に高めていく。

○伝え合う力を目標に沿って自らどう高めることができたか　自己評価力を高める。

○学んだこと（身に付けた言語能力、自己評価）を生かす視点をもたせた学習を設定する。（評価の活用）

こうした学習システムは、生徒一人一人が目標を内面化し、学習計画を複線的にもち、評価を活用する主体的な学びを生む、授業改善の有効な方策であると考える。同時に、こうした学習システムを通し、学ぶ意欲を育て、持続化させ、言語能力を高めていくことが自己コントロール力や自己肯定感をはぐくむことにつながっていくと考える。

研究の視点の中でも述べたように、そこには、学習環境として互いに学び合うことができるかかわりのある学習の設定や学びを支える学び方の学習が必要になってくる。このことについても、国語科として十分留意して取り組んでいかなければならない。

自ら学ぶということは、学ぶ過程はもちろん、目標設定や学習計画そして振り返りまで自らが行う主体的なかけがえのない行為である。そして、その一人一人の学びの過程から、自己コントロール力や自己肯定感がはぐくまれると思われる。

また、こうした学習システムは、学習指導要領の一般方針に示されている「自ら学び自ら考える力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」を具体化する一つの方法として意義のあるものと考える。さらに、近年の様々な調査から課題とされている学習意欲を高めるための一方策としても有効であると考える。つまり、一時的な情動だけでなく、自ら学ぶ学習システムを基盤とした学習によって、自己肯定感という感性的側面と自己をコントロールするという理性的側面から学習の意欲を高め、持続化していくことができると考えるからである。

中学校の１年生は思春期の入り口にあり、今後ますます心も体も疾風怒濤の不安定な時期に入る。その中にあって、自分を見失わず、自分を大切にしながら学習を続けることができる手だてを、学習指導の中に仕組んでいくことが大切である。

思春期の波は波として受け止めながら、波を乗り越えていくための自己コントロール力と自己肯定感をはぐくむとともに、思考力、表現力の源となる国語の能力を高めることが基礎・基本となる学力を身に付け、心豊かに生きるために必要なのである。